

## 今年度の調査成果

今年度の調査では、本丸に至る大手道の発掘調査のほか、庭園遺構や本丸周辺を巡る石垣の大規模な精査を行いました。

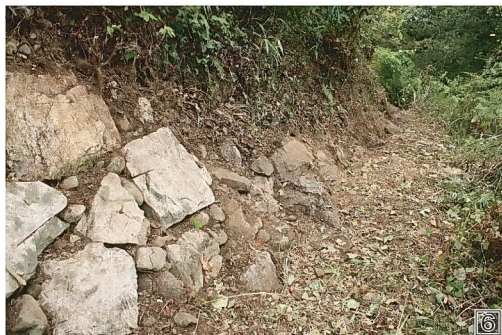
大手道では、3箇所にわたり調査を行いました。その結果、大手道の平面形の一部が分かりました。

本丸を巡る2段の石垣については、従来認識されていたよりも長く、総延長が約170mにも及ぶことが確認されました。石垣は、自然石をそのまま積み上げる野面積み(のづらづみ)と呼ばれる技法で、自然地形に応じて、「折れ」や「張り出し」を随所に取り入れて構築されるなど、安土桃山時代の技術を伝えています。

鳥羽山城は、土づくりの実戦的な中世城郭から、政治の場としての性格を帯びた高い石垣を持つ江戸時代の城郭へ移り変わる過渡期の姿を良好に示しており、城郭の変遷を探る上で指標的な事例として注目できます。



本丸西側鉢巻石垣



本丸北側鉢巻石垣



本丸腰巻石垣(西南隅)

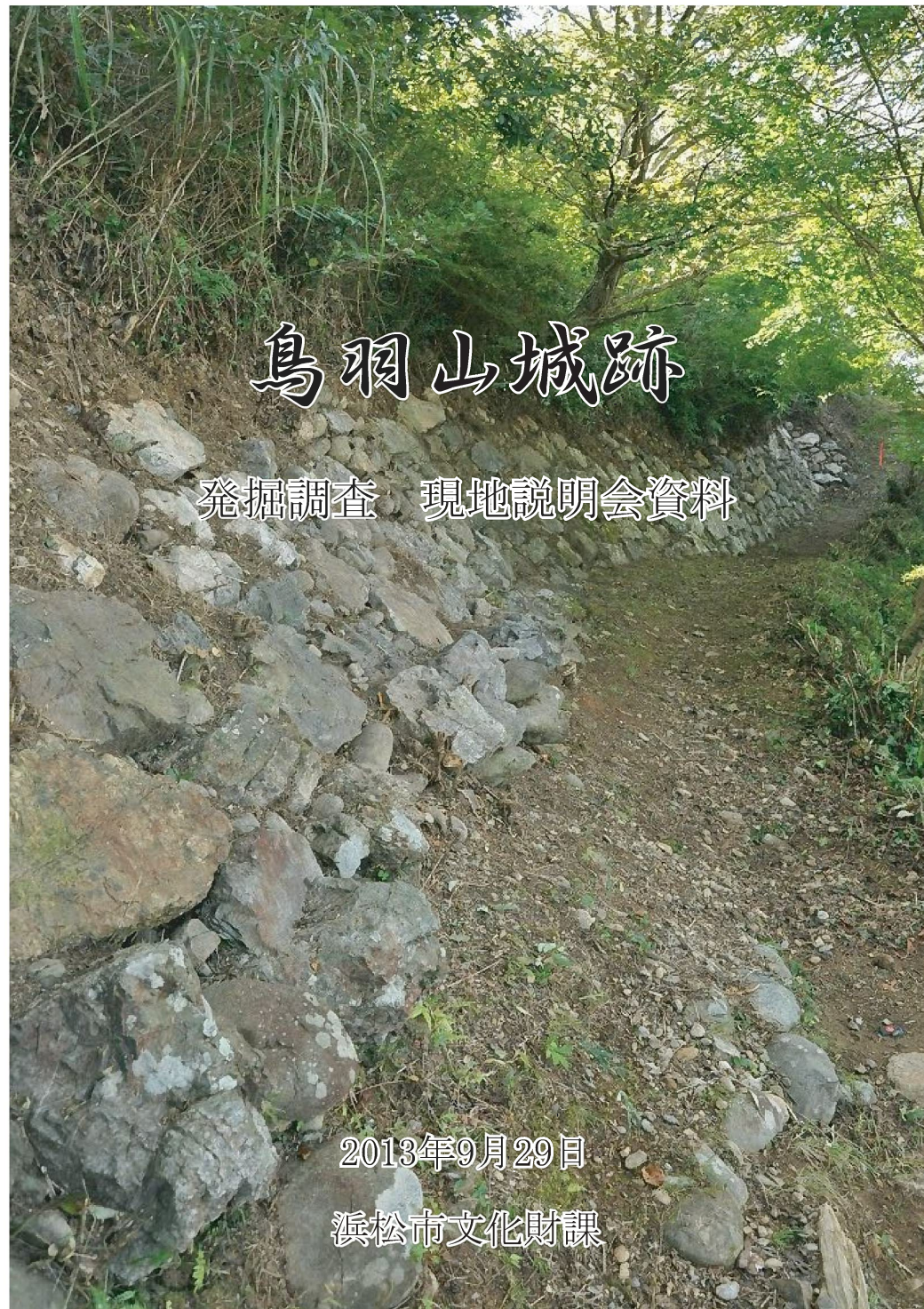


大手道石垣(北側)



大手道石垣(南側)

<お問い合わせ先> 浜松市埋蔵文化財調査事務所 TEL 053-542-3660



# 鳥羽山城跡

発掘調査 現地説明会資料

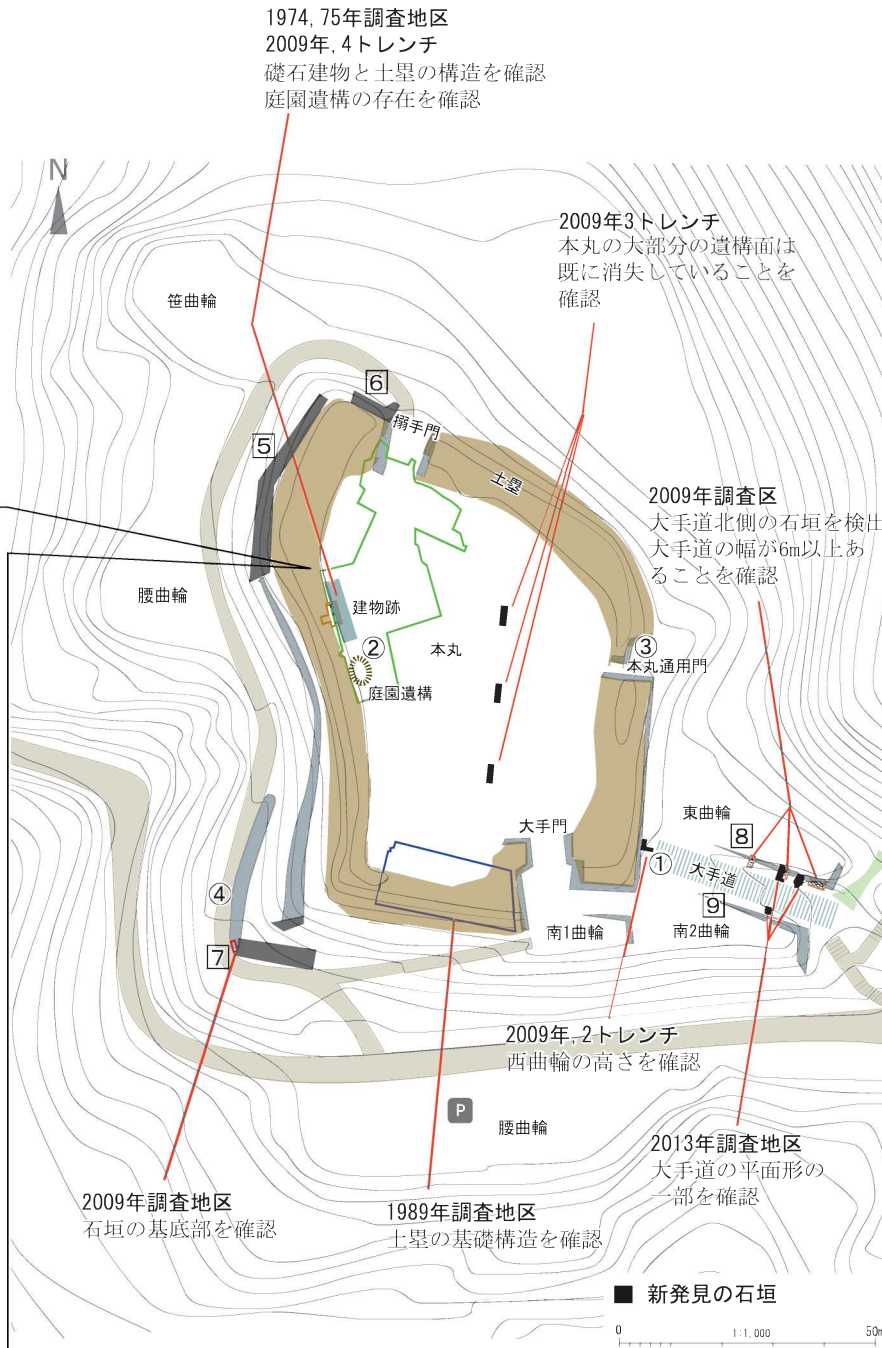
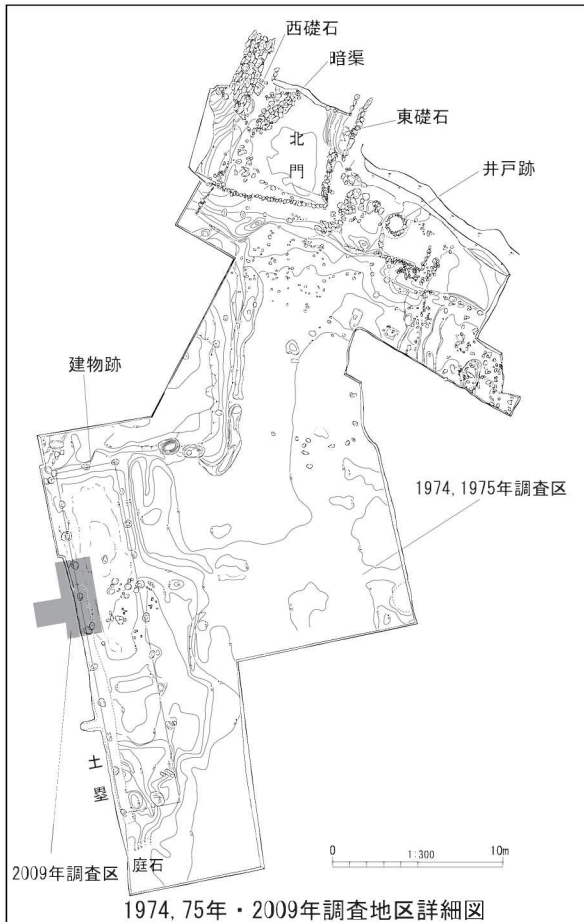
2013年9月29日

浜松市文化財課

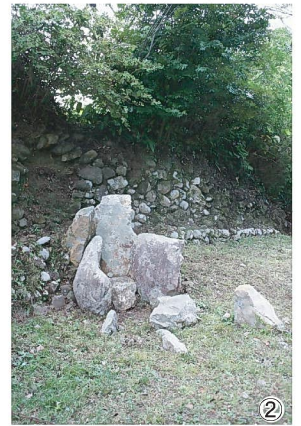
# 鳥羽山城跡

戦国時代の遠江周辺では、武田氏・徳川氏による山城の争奪戦が繰り返されていました。徳川家康が武田方にあった二俣城を攻める際、周辺の付城の一つとして鳥羽山城に本陣を置きました。

徳川・武田の攻防戦の後、天正18年(1590)、遠江の領主は徳川氏から豊臣系大名堀尾氏へと代わります。堀尾氏の時代に、鳥羽山城は二俣城と共に石垣をもつ姿に改変されたと考えられます。両城は「別郭一城」と呼ばれ、機能分化させた一つの城として使われました。二俣城は天守や大規模な堀切を設けて防衛を固めるなど実践的な機能を高めたことに対し、庭園や広い大手道を持つ鳥羽山城は、領主の日常生活や儀式的場としての役割を果たしていました。



本丸東側の石垣隅角



庭園遺構



本丸通用門



本丸西側腰巻石垣